憂国

Vol. 5
YUUKOKU

徳真会グループ
理事長　松村 博史

喧噪社会に思う

日本はいつからこんなに騒がしい社会になってしまったのでしょうか。
テレビのスイッチをひねると相撲界や政界等のスキャンダルを必要以上に取り上げて執拗に報道する番組が早朝から深夜まで流れ、見聞きしていて不快になったり、暗くなる話ばかりが殊更騒ぎたてられ、生きていて気持ちの安らぎを覚える事が、本当に少なくなってきていると思っているのは、果たして私だけなのでしょうか。

斉の管仲の書といわれる「管子」の中に
「衣食足りて栄辱を知る」（**人は衣食が足りてはじめて、何が名誉なことで、どのような行動が不名誉なことであるかが分かる**）
という言葉があります。
そして、この言葉をもじって、
「衣食足りて礼節揺らぐ」
という言葉がこの日本の現状を見ていると出てきてしまいます。
孟子も、衣食を主とした経済生活の安定を第一にしてこそ「道義の確立」が可能であるとして、
「恒産無くして恒心無し」
と管仲と同じ意の事を言いました。
しかしながら、現在の日本は衣食が足り過ぎているにもかかわらず、「道義の確立」を怠ってきた為に無節操で我利我欲的な言動をしながら、自分自身を省みる事もせず他人の批判ばかりして恥ずかしいとも思わない人達が増え過ぎた様に思えてなりません。

社会の責任ある立場の人達も、やたらと「世論」と称する、決して理性的と思えない妖怪の様なものを気にしすぎて、国家、社会のレベルや民度の継承という、次世代へ責任を持って引き継いで行かねばならない無形ではあるが国家や組織の根幹に関る一番重要なものを明確にせず、コロコロと安直に重要な方針を変えていくその在り方が、人々が未来に希望を持てなくなってきている大きな原因の1つではないでしょうか。

過日、マスセンチメントとパブリックオピニオンの違いが、ある新聞のコラムに書いてあり、強い共感を覚えました。
マスセンチメントとは、マスコミ等が右といえば右、左といえば左と不定見に動く感情的な風潮で、パブリックオピニオンと言うのは、一定レベルの見識を持った人達の共通の意見や価値観を言うものです。
そして、パブリックオピニオンと言うものは、ちょっとした事でそうコロコロと変わるものでもないという事です。
何が大事であるか、事の本質を案外一番きちんと見ているのがパブリックオピニオンだと私は思っています。
今日、日本社会の大きな問題はこのマスセンチメントとパブリックオピニオンの違いが明確になってない事ではないでしょうか。
「支持率」というその分析方法でさえ定かでない一つの動向で、この重大な局面にある現代日本の舵取り役の首相が、毎々コロコロと変わるこの状況は、果たして政治家だけの責任なのかを我々はもうそろそろ気づいて、真剣に変えていく段階にきているのではないでしょうか。

かつて日本人は、世界の中で最も精神文化の高い民族であったと私は思っていますが、今日の日本の現状を見るにつけ、まず我々中高年1人1人が、若い世代の範たる生き方、仕事の仕方をしっかりと示してゆく必要性を強く感じるこの頃です。